

# 「日本の劇」戯曲賞 2012 最優秀賞決定！

「日本の劇」戯曲賞 2012(主催／文化庁・日本劇団協議会)の最終選考会が 2012 年 8 月 28 日(火)、日本劇団協議会会議室にて行われ、最優秀賞が次の通り決定しました。

最終選考委員の演出家は、丹野郁弓、土田英生、西川信廣、原田一樹、宮田慶子の5氏(敬称略、50音順)です。

## ◎最優秀賞◎

### ナガイヒデミ 「水の音<sup>おと</sup>」

ながい・ひでみ／1958年生まれ。愛媛県出身。京都市在住。  
同人誌などで小説を書いてきたが、演劇も好きで、創作活動全般に興味を持つ。2009年10月～翌年3月、伊丹市のラストホール(伊丹市立生涯学習センター)で講座「台本を書いてみませんか」を受講。2010年5月～翌年3月、伊丹市のアイホールで伊丹想流私塾に第15期生として入塾し戯曲の創作を学ぶ。2011年5月、同塾の卒塾公演で掌編戯曲「贈り物」「控室」の2篇が上演される。いずれも数分間の作品。その後、伊丹想流私塾のマスターコースに進み現在も在籍。受賞作の「水の音」は、はじめて書いた長編戯曲作品。

最優秀賞受賞作品は贈賞として、2013年3月12日(火)～17日(日)の日程で恵比寿・エコー劇場にて上演されます。演出は丹野郁弓氏です。

なお、応募総数は69作品。一次選考を経て最終候補作品として選出されたのは、次の5作品でした。

#### ◆最終候補作品◆

堂本 甫	「ネヴォの周辺」
吉村健二	「ツインズ」
篠崎隆雄	「頑張れ、高島屋」
辻本久美子	「伏見モンマルトル」
岡本 守	「さよなら、お母さん」
尾崎秀信	「レスポスの盃」
坂本正彦	「穴」
ナガイヒデミ	「水の音」

※受付番号順



## 最終選考委員選評



### 西川信廣（日本劇団協議会会長／文学座）

今年度は69作品の応募を頂いた。応募して下さった皆様に御礼申し上げます。69作品のうち、最終選考に9作品が残った。それぞれ興味深い題材とユニークな世界を作り上げていて、選考委員の評価は分かれたが全体としては作品の質が上がったと思う。

それぞれの作品について選考委員の踏み込んだ議論の末、9作品のうち「ツインズ」「さよなら、お母さん」「穴」「水の音」の4作品に絞られた。「ツインズ」は老人を巡っての会話が思わぬ方向に走ってゆく不条理な面白さがある。その不条理な展開が中途半端に終わって残念だった。「さよなら、お母さん」は母と娘の愛情を巡る大きなズレと父親の距離には切実感があり良く書けている。しかし、単なる対立だけでなく、突如の娘の結婚話で三人の心がもっと揺れ、お互いに知らなかった心のうちが見えて欲しかった。「穴」は登場人物たちの「何としても村おこしの為の新しい目玉を」の熱い思いがパワフルで毒気のある笑いを生んでいて面白かった。ただ、少々強引さが目立ち笑いが失速するところが惜しかった。

最後に受賞作「水の音」は対話の上手さで9作品の中では最も完成度が高かった。初めて書いた長編戯曲と言うことだが、初めてとは思えないほど、じっくりと世界を構築している。ただ、少し冗漫なところがあるので、上演に向けて演出家とドラマドクターとのやり取りを通してさらに質の高い作品に仕上げたい。

最終選考に残った作品の作者は50代が多く若い作家の作品も残ってもらいたかった。ただ、応募頂いた作品の作者の年齢は20代から70代までと幅が広がった。次回は、是非若い作家の作品からベテランの作品が最終選考に並ぶことを期待します。



## 丹野郁弓(日本劇団協議会理事／劇団民藝)

今回最終選考に残った作品はバラエティに富んでいた。東京在住の作家はいなかった。この賞が全国にあまねく認知されてきたようでそのことを嬉しく思う。どの作品も素材には感心させられた。しかしそれをいかに料理するかが作家の力だ。この当たり前のことをしみじみ考えさせられる結果になったと思う。

評伝劇のジャンルに入るであろう「頑張れ、高島屋」。すんなり読ませる。しかしそこが逆にやや安直な印象を与える。歌舞伎役者が一人前になるまでの苦労話だが、好人物ばかりを配したことで深みに欠けたことが惜まれる。

評伝劇ではないが、「ネヴォの周辺」は実在した札幌の喫茶店に集う人々を群像風に描いている。各場面が単なるスケッチで終わってしまったのが残念である。周辺、であるからにはそれでいいのかもしれないが、人物たちの行く末が尻切れトンボで終わってしまい、物語としての求心力に欠ける。この2作品には狂言回しが登場する。便利な手法かもしれないが、勝負から逃げているような感じがするのは私だけだろうか。

「伏見モンマルトル」は戦争画家たちと彼らを取り巻く人々。それぞれの戦争責任の問いかけ方はなるほど、と思わせるが、それぞれの人生にもう一步踏み込んでもらいたかった。やや煩雑な印象。

「シベリア！」はシベリア抑留の芝居を作る演劇の現場の話である。今やこういう書き方でしか戦争を描けないのだろうか、と、ショックと納得とが私の中で交錯した。喜劇的要素を加味しようとしたのかもしれないが、演劇の現場の描写にリアリティーがなさ過ぎる。

「穴」は町おこしのために原人遺跡を発掘しようとする青年団。毒々しいエネルギーに満ちていてある種の勢いがある。人々の描写もそれらしくて興味深い。しかし結末は肩透かしを食らったようだった。もうひと踏ん張り毒々しく終わったらまったく別な印象になったのでは？

「ツイズ」における擬似家族による謎のあぶり出しという構造は非常に面白かった。台詞の運びもいい。不条理劇ととらえた選考委員もいらしたが、私はこれをリアリズム劇と読んだ。実はそこにこそこの作品の弱点があるように思われる。どちらにも寄らないふんわりとした個性がパワー負けした形になったようだった。

受賞に至った「水の音」。確かにスケール感はない。迫力のある展開でもなく、演劇的か、と言われれば演劇的でないような気もする。しかし何ともいえない魅力がある。もう恋愛をするような年ではないが一人も寂しい、そんな中年男女の心理が等身大で伝わってくる。生身の感情が切なく感じられた。

くぐくぐと述べたが、いずれにしても一つの作品を書き上げるという作業は想像もつかないほどの労苦を要するはずである。みなさんのご努力に最大限の賛辞を送りたいと思います。



## 土田英生 (MONO)

3年連続で最終選考委員を務めさせていただいているが、毎回共通して気になることは、戯曲を書く時のモチベーションがどこにあるのか、ということだ。今回も私が多くの最終候補作品に対して抱いた不満は「これまでにどこかで見たことのあるような物語を戯曲の形にまとめた」という印象だけを残して終わってしまい、作者それぞれの独自の声が聞こえなかったことだ。

一本の長編を書く苦勞はとてもよく分かるし、それぞれに時間と労力をかけていることは伝わるのだが、戯曲が魅力を持つ為には、やはり、その作者独自の視点なり、切り口なりが必要なのだと思う。それはアイデアと言い換えてもいい。歴史上の人物を描いた一代記だったとしても、その人物の切り取り方だったり、描き方だったり、読む者にこれまで味わったことのない驚きや感動を示せなければ、作品としては力を持ち得ない。戯曲を書くこと自体をモチベーションにしては何も生まれない。それ以前にモチベーションがあり、それをどのようにして戯曲の形で示すのか、それが大事なんだと思う。

今回の候補作の中で、私が唯一それを感じたのが「水の音」だった。戯曲の形式としてはあまりにもシンプルで動きがなく、展開が単調ではあったが、それで交わされる台詞のやり取りには体重がしっかり乗っていて、引き込まれた。

「ツイズ」「穴」などにも、作者の思いを感じることはできたが、細部の工夫や丁寧さに欠けているのが残念だった。

自らの視点で眺める世界をしっかりと感じ取り、そして、それをどのようにすれば本当に他者に届けることができるのか格闘する。何かを書くということは、自らを晒し、自らを傷つける行為でもある。それが表現というものなのだと思う。





## 原田一樹（劇団キンダースペース）

印象は選考委員によって分かれたが、最終に残った9作品は演劇への向き合い方がそれぞれで、つまり応募作品の全体的な底上げを感じさせた。作者の年齢層がほぼ50代。今後は若い世代の応募にも期待したい。以下各論。

第1回から私自身の審査方針としてぶれていないつもりだが、演劇というものは形を整えるため、巧くまとめるためにあるものではない。演劇に限らず集団芸術は何層もの出会いによって深められていく。そのためにはまず書き手が自分を疑い、追い込み、自分の中の他者と出会う、という意思がなくてはならない。創った設定に人物を対置し、葛藤を深め、作者である自身も未だ見ていない世界に辿り着くのだという思いが作品の力になる。手の内の技術、既存のイメージでの創作は量産の一本。機械やマニュアルに任しておけばいい。

その辺りを感じさせてしまった三本について。

「ネヴオの周辺」気になったのは、マスターが逃亡中の友人左翼活動家の村木の最期の様子を特高警官から聞かされ、狂気だったと納得してしまう、ところ。このあと妻は、預かった村木の娘を奪われてどうするのか？ その深さを描ければ、そこに他者がいる。

「がんばれ高島屋」単に人間関係のドラマになってしまった。同じ物語が寿司屋や大工でも書けてしまう。役者の評伝である以上芸の本質について、書きこまなくては。

「伏見モンマルトル」簡単に出世したり、絵が描けたり描けなかったり、対話が一方からの提示にしかっていない。三好十郎の「炎の人」は読まれましたか？

「レスボスの壺」雰囲気があるばかり。生身の女優に語らせて成立しない。行為を書かずに形象だけ描いてコスプレ演劇。この関係は三島の「班女」や椋図かずおの漫画にも優れたものがある。

「シベリア」抑留という重い歴史経験を消費社会に生きる若者が捉えようとしたら、このぐらいがせいぜいと言う潔さは評価。が、演劇現場の描き方が、安直。

あとの四本で議論になった。

「さよなら母さん」母子関係の切実さはいい。婚約者のありかたが予定調和的。この母の母親的なる病は、娘の中にもある、という視点があればもう少し深くなった。妊娠中にして、生まれる子に対し自分も母のようになるのではという恐怖があってもいいのでは。

「ツイズ」街の人々を描く不条理劇とみれば面白い。不足の思いは老人ではなく、その妄言に自らあわせて行く街の人の方にあるのでは。

「水の音」総合点で今回の受賞。これを書くんだという痛みは感じさせる。

「穴」個人的には最も高評価。エネルギーの裏に絶望が見える。各人物の行為への妄信とパワーで読ませる。空回り感がいい。イノシシの象徴性を再考すればもっとよくなった。筆圧の高さは是非、今後もキープしてください。



## 宮田慶子（日本劇団協議会常務理事／劇団青年座）

今年度の「日本の劇」戯曲賞は、20代から80代までの幅広い年令層から、69本の応募が集まり、最終選考に9作品が残るといふ、実り多い年となった。

最終選考に残った9作品は、それぞれ作風も異なり、劇作に託した、作者の企みの多様性や発想の柔軟さが感じられた。

例年、選評の際に指摘としてあがっていた「構成力」や「個性の書き分け」や「セリフの力」なども、全体的に水準は高く、嬉しく、興味深く読ませていただいた。

それぞれの作品の魅力をふまえた上で、気になったことなどを少しあげてみる。

「ネヴォの周辺」は、作者の“札幌”に対する想いが感じられる。素直な時系列で物語が進行していくが、その分、対象への視点が分散したように思う。群像劇としても、一人一人への切り込みの深さが欲しい。

「ツインズ」は“失った片方”のモチーフの重ね方に工夫があるが、観客の立場として、義一の内面世界への距離感がつかみにくいのが惜しい。冒頭のモノログで、義一のイメージを固定させない方が、義一への興味を促すかもしれない。

「頑張れ、高島屋」は、綿密な資料と特殊な言葉遣いなどの魅力があるのだが、後半に“背の低さ”以上の芸談としてのふくらみが欲しい。

「伏見モンマルトル」は、場面展開が、実際の舞台化の処理としては難しい“映像的な切り替え”が気になった。偶然的な出会い方の多様にも工夫が欲しい。

「さよなら、お母さん」は、歪んだ親子関係を執拗に描く緊迫感があるが、直線的な展開なので、後半がやや滞ってくる。父や婚約者という男達のふくらみが欲しい。

「レスボスの盃」は、耽美的な世界観を描こうとする意図はわかるが、言葉に頼りすぎているので、劇的な空気の密度が変化しにくい。関係性に大きなうねりが欲しい。

「穴」は、方言をうまく使いながら、ブラックコメディとしての企みや味わいが面白い。“殺人”の要素が、リアリティのある流れを薄めてしまったように思う。

「水の音」は、ワンセット、三人のみの設定で、リアルな「定点観察」のような説得力がある。50才という年令設定をうまく描いており、登場しない人物が生き生きと立ち上がってくる魅力がある。

「シベリア」は、演劇制作の現場の描き方にリアリティがないので、題材そのものの説得力を弱めてしまう。二重構造の枠組みは、それぞれが確かな世界で描かれない。

以上のことをふまえ、最終的に「水の音」が受賞作となったが、上演を前提としたこの賞の特性を生かした、「人間」の見える舞台に、大きく期待している。